

ピエール・パスカル
『ロシア民衆の宗教』
翻訳の試み(7)

鈴木 淳 一

Pierre Pascal
《La Religion du Peuple Russe》

translated by J. Suzuki

これは「文化と言語」第55号（2001年10月31日）、第57号（2002年10月31日）、第58号（2003年10月31日）、第60号（2004年3月30日）、第61号（2004年10月29日）、第62号（2005年3月29日）に掲載したピエール・パスカル著『ロシア民衆の宗教』翻訳の続き（そして最終回）である。今回取り上げるのは、前6回に引き続く第3部——第3部は6章から成っている——の5～6章、それに「後記」である。

今回も前回同様、原注は「1、2、3…」と番号をふって脚注の形で示し、訳注は「(1)、(2)、(3)…」として章末にまとめて載せることにしたい。ただし、ごくまれにだが、訳注を便宜上 [] に入れた形で、本文あるいは脚注に直接組み込むこともある。

第3部

迫害に対するロシア民衆の抵抗

第5章 合法的可能性

殉教とはしかし、もしもそれが最終確認であり、その意味ではある種の勝利だとしても、数々の危険や制約を撥ね退けて自らの宗教を実践しようとする日々の努力を無化してしまうわけではない。とすれば確認すべきは、ロシアの民衆がその生きた時代に応じて彼らに残された可能性をどのよに有効活用したかということである。

革命期からソ連時代の初期には、確かにいくつかの可能性が残されていた。たとえば1925年に総主教チホンが逝去したとき、何万という信徒が誰憚ることなく、総主教の居住先であるドンスコーイ修道院への巡礼を敢行している。また1926年にレニングラートのアレクサンドル・ネフスキー大修道院が総主教の教会として返還された際には¹⁾、大修道院をかつての姿へと復元するために、1時間で多額の寄付金が集められている。閉鎖を免れた少数の教会はどこでも連日、信徒で膨れ上がった。権力側がたまたま容認するようなことがあると、焼き払われた教会が即座に再建された。「粛清された」教会は、別の速成された木造教会に取って代わられた¹⁾。その年の1年間を通じ、教区の信徒たちは、増加の一途を辿る税金、そして教会の保険金と補修費を支払うためにすべてを投げ打った。しかも聖域を保持できるという希望などないままに、ただひたすら聖域の閉鎖を遅らせるためだけにすべてを投げ打ったのである。修道

¹⁾ こうした出来事のいくつかは、マルテルを憤慨させている(前掲書、107-108頁)。私はこうした出来事の他の例もいくつか知っている。

院が解体されると、その構成員たちは農業共同体として再結集し、その偽装が摘発され、厳しく処罰される日まで共同生活を続けたのであった。ロシアは巨大な国であり、地方のトップに立つ人の誰もがひとしなみに非寛容的だったわけではない。宗教活動に目をつぶってくれる人もまたいたのである。

ここで1934年にウラル地方のさる小村で起こった出来事を紹介しよう。この村の宗教生活は死滅したかのようであった。17あった教会も、残すは一つのみであった。だがあるとき突然、流刑に処されていた数人の信徒が帰還し、特赦された一人の主教がその村に居住することを許可された。主教は喜んで迎え入れられた。日々彼の買物姿が見かけられたが、そのときの彼は法衣を纏い、胸に十字架をつけ、手には玉葱を持っていた。彼は村で唯一の教会で礼拝をおこなった。徴税官はすぐにも主教との縁を切る腹積もりで、彼に13000ルーブリもの重税を課した。どうあがいてもこんな大金は用意できまい、というわけである。しかし8日後、主教は全額耳を揃えて支払ったのであった。信徒たちが1ルーブリずつ丹念に集めた結果であった²。

司祭の数が十分ではなかったので、集団による懺悔や罪障消滅宣言が盛んにおこなわれた。教区主任司祭を筆頭に住民すべてが収容所送りとなった上述の村では、村人がこぞって聖セルギーの町、セルギーエフ・ポサートの教会へ詣で、みなして最後の罪障消滅宣言を受けたのであるが、それはどんなにか壮観な光景だったことだろう！³

逮捕され、収容所へ送られることをはっきりと知っていながらもなお、教会に対して忠実であり続けるということ——これこそ、司祭たちはもちろん、教区を預かる20人の責任者たち、そして正教信徒全般の側における紛う方なきヒロイズムである。

だがもっと好ましい事例がある。悲劇的状況や信仰篤き民衆の生き方が、教

² 「最新ニュース Последние новости」1938年3月7日付の記事。これからもパリで出版されていたこの新聞からしばしば引用する。この新聞にはソ連の出版物における情報がかなり客観的に再録されているからである。

³ こうした光景については、集団化がおこなわれた時代にモスクワで語り広められた。

会が権勢を誇った時代に教会から離れていった人々を、いまは一敗地に塗れた教会へと連れ戻したことである。知識人たちもまた教会へ回帰していった。革命初期には多くの学者や作家、それに若い人々が、高名な長老との面会を求めてアレクサンドル・ネフスキー大修道院を訪れている⁴。

いくつもの学生グループがそこかしこで集会を開き、福音書を研究し、公式の唯物主義について討議を重ねた。これらのグループは告発を恐れず、最終逮捕の瞬間まで活動が続けている。こうして逮捕された学生の一人に対するゲー・ペー・ウー（国家政治保安部）の告発状には、次のように記されている——「貴君は我々にとっていかなる賊よりも危険な存在である。なぜなら我々は、宗教と科学が相容れないものであることを証明しようとしているのに対し、貴君の存在はその正反対を指し示すものだからである」。

共産青年同盟に所属する無信仰の青年たちの間でさえも、宗教への回帰現象が見られた。最近亡命した男性は、自らも収容されていたノヴォシビルスクの収容所で、国家転覆の陰謀を企てたとの濡れ衣を着せられ、死刑を宣告された、元鉱山専門学校生の老人6人に会った、と語っている。ところで真相は以下のようなことであった。彼らの中の一人がある日偶然に福音書を入手し、たんなる好奇心から読んでみたところ、天地がひっくり返るようなショックを受けた。彼はこの天啓を仲間たちにも享受してほしいと願い、その結果他の5人も彼同様に、すっかり福音書に魅了されてしまった。それ以来彼らの人生はまさしく一変してしまった。彼らはすぐさま嫌疑をかけられ、告発された。逮捕された彼らは、根も葉もない起訴事実を否認したが、また同時にその信仰を告白もしたのであった⁵。

当局の迫害が鳴りを潜めたかのように見えると、民衆は進んで自らの信仰を告白するようになる。1936年に発布された憲法は全市民に投票権と信教の自

⁴ 「正教国ルーシ Православная Русь」1949年8-9号。

⁵ ウイーンの雑誌「カトリック圏 Orbis catholicus」1949年11月号、503-504頁。学生について語ることが、民衆の抵抗という問題からの逸脱を意味するわけではない。ロシアの学生はいつでも民衆にきわめて近い存在だったからである。

由を認めているが、そのときソ連の新聞雑誌はすぐさま宗教ルネサンスの高揚を予期して慄然としたのであった。だがこの恐慌状態は、当然のことながら、見せかけでしかない。それはただたんに新たな大量逮捕を喚起するとともに、正当化するのに役立ただけに過ぎなかった。とはいえ、この恐慌状態のおかげで我々は、前兆的な事実のいくつかを知ることができるのである。

憲法発布後、新しい「礼拝の場」が続々と建造されてゆく。ドネツでは、炭鉱夫たちが自宅補修用の建築資材を調達し、それをそっくりそのまま宗教団体へ供出している⁶。マグニトゴルスク地方では、なんと当局と戦闘的無神論者同盟の協力のもとに、「大聖堂」が建立されている。またウラル地方のヴォルコフの場合、教会補修の必需品を供給したのは、戦闘的無神論者同盟のトップが書記を務めるアルミニウム工場である⁷。そこかしこで閉鎖された教会の再開要求が叫ばれていたのである⁸。

地方では、祝祭日が、それがたとえ労働シーズンの真っ最中であろうと、恥も外聞もなく縦横無尽に祝われている（祝祭日はこの先も存在し続けるが、そのことは1939年に再び新聞雑誌が祝祭日に対する懸念を表明していることから分かる）。祝祭日にはまた、閉鎖された教会の奉献する聖人たちまでもが記憶の底から呼び起こされている⁹。農民たちは新たな収穫の加護を神に祈り、雨乞い儀式の行列を催してもいる。またあれこれのイコンが再び農家に姿を見せるようになっている¹⁰。

最悪なのは、こうした事態がコルホーズ内で生じた場合である。こともあろに、コルホーズの責任者たち自身が郡当局へ村の全家屋の加護を神に祈るための許可を願い出る、といった光景も目撃されている。学校でさえも例外ではなかった。十字架と旗を掲げた行列は学校の中にまで入り込み、そこでも誓願の

⁶ 「勤労 Труд」 [ソ連労働組合中央評議会機関紙] 1937 年 8 月 27 日号。

⁷ 「最新ニュース」 1937 年 7 月 5 日号。「プラーヴダ」紙からの転載記事。

⁸ 同前、1937 年 6 月 5 日号（キエフ地方）、1937 年 8 月 8 日号。

⁹ 同前、1939 年 7 月 2 日号（「無神論者 Безбожник」18 号からの転載記事）、1939 年 8 月 20 日号（「無神論者」23 号からの転載記事）。

¹⁰ 同前、1939 年 7 月 8 日号（「無神論者」19 号からの転載記事）。

礼拝が挙行されたからである¹¹。学校の生徒たちはほとんどこの地方でもクリスマスを祝う習慣を復活させ、昔どおりに陽気に浮かれ騒ぎながら家々を巡り歩いたが、評議会のメンバーや教師たちからさえも歓迎されたのであった¹²。

迫害がどれほど民衆自身からは望まれず、権力側だけから、しかもときには地方当局ではなく、権力最高上層部だけから望まれたものであったかということを実証する事実については、「無神論者」1938年21号が憤然とした調子で次のように伝えている——「ウラル地方のクウシワ郡において、さる精錬所の労働者たちが荒廃した教会を修復しようと思い立った。隣村の消防団がその修復事業を受注することになった。民兵や評議会の協力のもと、修復に必要な資材が集められた。こうして修復は実施され、教会の責任者たちは消防団へ協定代金として総額2000ルーブリ支払った」。

自分の子供に洗礼を施す共産党員のこと、教会で結婚することができるようにと辞表を出す共産青年同盟員のこととも報告されている¹³。

こうしてついには司祭たち自身が大胆になるとともに、当世風になってゆく。彼らはソ連当局への忠誠を振りかざしながら、村へのトラクターの到着に対して神の恩寵を願う礼拝を執り行なうかと思えば、あるいはまた新憲法に対して恩寵の礼拝を執り行ない、しかもそうした機会を利用して新憲法が許容する活動の可能性について説教までするようになるのである。そして彼らは、新憲法の研究を隠れ蓑に、信徒のサークルを組織してもいる¹⁴。さらに彼らは法の網の目をかいくぐりながら、合唱団や歌の練習、劇場公演、サッカーの試合などといった口実のもとに、宗教の宣伝活動を展開していったのだった¹⁵。

¹¹ 同前、1937年7月4日号（「社会主義農業 Социалистическое Земледелие」6月29日号からの転載記事）。

¹² 同前、1939年4月18日号。

¹³ 同前、1939年7月8日（「無神論者」19号からの転載記事）。

¹⁴ 同前、1937年7月4日号。「勤労」1937年9月24日号。

¹⁵ 同前、1937年7月6日号、1938年11月22日号。「無神論者」1938年6、7、21、24、30号、1939年4号。

こうした執拗に持続する宗教感情に対する戦闘的無神論者同盟側からの反撃は、十分なものではなかった。神という仮説の無益性を証明する目的で天文学の会合が持たれたが、その会合が終わると、次のように叫ぶ労働者の声がこだましたのだった——「主なる神はなんと見事に世界をお創りになったことでしょう！」¹⁶。学識、経験ともに豊かな信徒の面前で、唯物論者の明言に必ずしも満足できない青年たちに質問を浴びせかけられたとき、公式筋の講演者たちはその脆弱さを露呈させてしまう¹⁷。聖書、あるいは福音書には、たとえそれらを批判するためとはいえ、好奇心を呼び覚ましてはまずいので、あまり言及しない方が得策だと考えられていたのである¹⁸。

以上のことを踏まえれば、信仰が死に絶えることなどなかったことが分かるし、そうした事情は、うっかり戦闘的無神論者同盟、あるいは共産青年同盟に加わった人々においても変らなかった。

第3部第5章「合法的可能性」 訳注

- (1) アレクサンドル・ネフスキー大修道院は1918年、ボリシェヴィキ政権最初の社会福祉人民委員アレクサンドラ・コロantaiによって、社会福祉という名目のもとに政府に接収された。この接収に際しては、総主教管轄下の修道院を守ろうとする信徒と赤軍兵士との間に激しい戦闘がおこなわれ、何百人もの犠牲者を出している。

¹⁶ 「イズヴェスチヤ Известия」1937年4月27日号、クループスカヤ Крупская による報告。

¹⁷ 「最新ニュース」1939年4月2日号。

¹⁸ 「勤労」1938年12月14日号。

第6章 非合法活動

合法的な可能性とは言っても、それは取るに足らない、そして一時的なものでしかなかった。1936年の小康状態以前では1929年から1932年にかけての悲惨極まりない時代があったし、以後の1937年には大規模な迫害が実施されている。教会も司祭もなしに、いかにして宗教活動が可能か？ ロシアの正教信者たちは面従の態度をとる。しかしそのとき同時に彼らはまた腹の中で、是が非でも宗教的な欲求を満たそうと、あらん限りの新しい手段を模索していたのである。

聖人たちの聖遺物は押収され、反宗教博物館に陳列されていた。ところがあるろうことか、人々がそこを訪れるのは聖遺物を崇めるためであった。そしてときには聖遺物にこっそりと接吻することさえできたのである。

修道生活は禁止されていた。だがあるろうことか、秘密裡に修道士の誓いを立て、世俗世界でその誓いを守り通す人々もいた。1929年ソロヴェツキー島に、モスクワはタガンカ刑務所の医務長を務めたジジレンコ教授が収容されていた。彼は非合法である修道士の誓いを立てた廉で逮捕されたのである。彼はまた秘密裡に主教に聖別されさえしていた¹。かくして新聞雑誌はやがて、乞食に身をやつし、「迷信」を撒き散らしながらロシア中を経巡る修道士、および修道女の数の多さに、驚天動地の念を表明することになったのであった。

ここで非合法に存在した聖職者について言及しておこう。司祭の中には逃亡することによって逮捕を免れた者たちもいた。彼らはどこにも定住できなかったが、靴職人や竈職人、行商人、季節労働者などに身をやつして旅して歩き、それぞれの職で生計を立てていた。そして小さな町や村へ到着すると、あれこれ情報を集め、状況を見極め、信徒を探し出すのである。信徒たちは互いに信

¹ 「正教国ルーシ」1947年13号9頁、1951年1号6頁。

徒であることを名乗り合い、巡回司祭が宿泊する百姓屋では、おそらく長い間できないでいた宗教儀式のすべてが慌しく執り行なわれた。親たちは子供に洗礼を施してもらい、夫婦は自らの結婚を祝福してもらった。そして信徒たちは罪障消滅宣言をしてもらい、さらにもしも可能とあらば、払暁に礼拝式までもが挙行されたのである²。

こうした巡回司祭たちは、当然のことながら、もっとも熱心であり、もっとも勇敢な人々であった。彼らはまず何よりも、府主教ピョートルと志を同じくする人々であった⁽¹⁾。ソ連の新聞雑誌は繰り返し、ピョートル一派の逮捕を事細かに報道している——「浮浪者が大量に逮捕された。彼らの中には多数の修道士、それに聖職関係者が含まれている。ヴォルガ川右岸に位置する、マリ自治共和国の村で逮捕された主教、セルゲイ・ドルウジーニンもまたそうした一人である。村の住民は彼を聖人として崇めていたのである」。またウラル地方では主教デメンチーが逮捕されているが、聖職に就いたこのかつての裕福な農民は、共産主義者たちからさえも敬愛され、正教徒たちからは予言者とも、ユローヂヴィともみなされていたのだ³。

迫害は、当然のことながら、続けられた。たとえば、子供に洗礼を受けさせた親たちは、「未成年に対して暴力を振るった」廉で裁判にかけられている。もしも洗礼を受けた子供が就学年齢に達している場合には、担当教師が職務怠慢の廉で、あるいは共犯の廉で起訴されたのであった⁴。

我々が集団洗礼について何がしかを知ることができるのは、こうした起訴事実のおかげに他ならない。10人から12人の集団洗礼もあったし、28人の集団洗礼もあり、後者の場合は4、5歳の子供が数人含まれていた。また25人の集団洗礼もあったが、その場合さらに悪いことには、儀式が行なわれたのがな

² 「経済生活 Экономическая жизнь」1937年142号。こうした司祭の一人がバクー港で見つかっているが、彼は水夫長に身をやつしていたのだった。

³ 「勤労」1937年4月15日号。「社会主義農業」1938年1月11日号。「無神論者」1939年4月21日号。「最新ニュース」1938年7月1日号。

⁴ 「コムソモーリスカヤ・ブラヴダ Комсомольская Правда」1938年3月27日号。

んとコルホーズ長の兄弟の家であった。また「無神論者」誌の伝えるところによれば、ヴォーログダ市では毎週日曜日、ヴォーログダ市内からは言うに及ばず、近隣の諸郡からも子供たちが墓地の礼拝堂へ連れてゆかれ、洗礼を施されていたのであり、さらには大人たちまでもが洗礼を受けていたのであった⁵。

しかし、巡回司祭がいつでもいたというわけではなかった。そのためロシアの農民は別の解決策を用意していた。尊敬の的となっている平信徒が洗礼を授けるのである。ただその際その平信徒が聖水散布に用いるのは、予め司祭によって聖別され、瓶に保存された聖水であった。ソ連の新聞雑誌は、洗礼というロシア正教の儀式がこのように濫用されることに対し、憤りを表明している。また結婚する場合には次のような手順が踏まれている。まず両親のうちのどちらかが二つの指輪を最寄りの司祭のところへ持ってゆく。司祭はそれらの指輪に対して結婚の祈りを唱える。すると結婚そのものが祝福されたということになるのである⁶。

葬式の場合、死体はソ連式に埋葬されるが、墓穴の上から一握りの土ができるだけ速やかに故人の名とともに司祭のもとへ運び込まれ、そこで埋葬の儀式を施された後、再び墓の上へと運び返された。こうした行為は集団でも実行することができた。たとえばキエフでは、こうした一握りの土がまとめてキエフの町へ運ばれ、そこでいったん祝福を受けた後に両親たちのもとへ返却される。それから両親たちが墓地へ赴き、その土を墓に散布するのだが、こうすることで墓もまた間接的に祝福されるというわけである。リャザン地方ではどうやら二人の非合法修道尼が、前もって一定の土塊を祝福してもらい、その土塊

⁵ 「無神論者」1938年4号、1939年4月11日号、7月21日号。こうした状況は1961年にいたっても変わっておらず、「文学新聞 Литературная Газета」1961年11号はこう伝えている——「3ヶ月毎にどこからともなく司祭がやってきて、彼の不在中に生まれた子供たちに洗礼を施し、信徒たちの懺悔を聴聞し、堅信の秘蹟を授けるのである。こうした巡回司祭による布教活動はまさに効果覿面で、その成果は一目瞭然である」。これはモルドヴィア共和国での出来事である。

⁶ 「最新ニュース」1939年6月23日号、25日号。同様の事実については、「反宗教者 Антирелигиозник」1940年2号24-28頁にも報道されている。

を巡礼に持たせて僻地の必要な人々へと配給するという方策まで考えていたようである。この方策はリャザン地方に引き続き、モスクワ地方全域にも膾炙している⁷。

このように合法的な活動と非合法的な活動とは互いに交じり合い、相互補完的な関係にあるのである。しかも専制的な体制下にあっては、合法と非合法とを分け隔てる境界線の在処など見極められるはずもない⁸。その結果往々にして信徒たちは、足繁く通うのが危険でもあり、維持費も高い公認の教会を捨て、自ら進んでどっぴりと非合法の世界に浸かることの方を断固良しとしたのである。1937年から1939年にかけてのソ連の新聞雑誌は、こうした事態を憂慮するニュースで溢れ返っていた。たとえば、ムウロム市ではさるグループが摘発され、「粛清」されている。このグループの領袖を務める司祭は、教会の放棄を説く一方、自宅の地下に地下礼拝堂^{カタクコンベ}を掘り、そこに信徒を集めていたのだった。キネシマ市でも同様に、さる司祭が教会の放棄を扇動し、彼のもとで祈るほうがましだと宣言している。イワノヴォ地方では各教区を代表する「20人の責任者のグループ」が、総主教セルギーの支配下から離脱した主教に教唆されて、自発的に解散している。トゥーラ市ではさる司祭が、教会が社交場と化してもかまわない、礼拝式は秘密裡に執り行なわれるだろうから、と宣言している⁹。その他、富農や輔祭の自宅、それに世間では還俗を装いながらも、その実さる宗教組織の領袖を務めている司祭の自宅が非合法の礼拝所として機能している地域もあって、女性たちはそうした非合法の礼拝所へ新生児を洗礼

⁷ 「無神論者」1938年14号、20号、1939年12号、19号。「最新ニュース」1939年6月30日号。

⁸ 1937年、オリョール市の主教と12人の司祭、3人の輔祭、2人の修道尼、それに12人の平信徒が起訴された稀代の裁判をめぐる、公式筋の宣伝活動が大々的に実施されている。起訴条項は反革命的陰謀の他に、主教による一般的な懺悔聴聞、町から追放された司祭の地方教会への配属、教会の再開を要求する信徒たちの扇動活動、就学年齢児童に対する洗礼、司祭宅での懺悔、カトリック司祭からの職務遂行手順の借用などであったが、こうした活動のどれ一つ、文字通り非合法と言えるものではなかった。(アンダーソン、前掲書、180-186頁)

⁹ 「無神論者」1938年21号、26号、27号。

に連れてゆくとともに、そこへ主の洗礼祭の聖水を付け届けてもいる、等々¹⁰。

成員すべてが監視下にあるコルホーズにおいてさえ、逃げ道があれこれと捻り出された。たとえば「無神論旅団 brigade sans Dieu」を自称する農民の一人団があった。彼らはそう自称することによって再開された教会に通わないばかりか——こうした現象が見られたのは、第2次世界大戦直後頃のことである——、日曜日には僻遠の耕作困難な原野で働いているふりをした。一見すれば、彼らは「労働の英雄」であり、筋金入りの無神論者である。だがその実、彼らの中には非合法の司祭がおり、彼らが自称する日曜労働とは実は、人目を避けて手短な礼拝式を執り行なうための隠れ蓑だったのである¹¹。

大勢の人々が公認の教会から遠ざかり、より純粹であるとともに、おそらくはより信頼に足る非合法の宗教へと走るまでに、大して時間はかからなかったように思われる¹²。この宗教が組織化されていたのか、そこにはヒエラルキーがあったのか、地下礼拝堂^{カタコンベ}の教会が本当にあったのか——これらはその性質上依然として、明確に答えることの難しい問題である。非合法の信徒たちは長い間、カザンの府主教キリールとの関係を保っていた。1936年、キリールが流刑地で没すると、彼らは次にレニングラートの府主教ヨシフを聖人として祭り上げたが、ヨシフはそのことが原因で1938年の末に銃殺されている¹³。続いてヤロスラーヴリの主教セラフィム始め、ヴァラーム主教、エヴゲニー主教、ヴィッサリオン府主教、エカテリンブルクの大主教グリゴリー、ワシーリー主教などの名前も引き合いに出されている¹⁴。ソロヴェツキー島の収容所では、

¹⁰ 「無神論者」1938年3号、10号、31号。「最新ニュース」1938年11月12日号。

¹¹ 「正教国ルーシ」1949年。

¹² 1948年の秋、ウラルに滞在した青年は、こう宣言している——「今日、一番信頼できるのは、平服を着て、髭を蓄えていない司祭である。髭を蓄え、法衣を纏っている司祭、何よりも胸に十字架を下げている司祭は、警察の回し者以外の何者でもありえない」（「ロシア思想 Русская мысль」1949年10月、183号付録）。

¹³ 「正教国ルーシ」1951年1号8頁。

¹⁴ 「プラーヴダ」1937年3月2日号。「無神論者」1938年3号、4号、1939年1号。「最新ニュース」1939年1月13日号。

マクシム主教 (もと医務長)、ヴィクトル主教、イラリオン主教、ネクトル主教が、非合法の司祭叙階式を執り仕切っていた¹⁵。これ以上解明の光を当てようとするれば、政治警察の古文書を紐解いてみなければなるまい。確かなのは次のこと、すなわちロシア正教会のヒエラルキー全体が府主教セルギーに、後に無神論を標榜する権力への全的服従によって総主教にまでなったセルギーに、必ずしも足並みを揃えて追従したわけではないということである。

非合法の司祭というのはきっと、ごく稀にしかいなかったに違いない。だから、1945年2月にアレクセイが新総主教の座に就任し、新たな聖職者組織が必要となったとき、探索の手が強制収容所にまで伸びたのも自然の成り行きであった。アレクセイをロシア正教会の長として認めると宣言した司祭たちは、自由を与えられ、あちこちの教区へと配属されたが、その一方で囚人のまま留めおかれたり、銃殺刑に処された司祭たちもいた。いずれにしてもほとんどの地域では、司祭が不足していたから、祈祷式のために信徒を集めたり、聖別されたパンとワインを調達、保管、分配したりするのは、熱心な平信徒に他ならなかった。ときとしてこうした役割が秘密裡に信仰告白をした女性によって担われることもあった¹⁶。カトリック教徒ならば司祭不在にかなりの当惑を感じるであろうが、ロシア正教徒はそれほど動揺したりはしない。後者の宗教儀式が前者のものほど厳格に秩序立てられてはいないからである¹⁷。しかもそのうえロシアでは、その国土の広大さゆえに平時においてさえもしばしば、教会なしで済まざるをえないのである。

非合法活動は旧教徒にとっては何ら目新しいものではない。「無神論者」誌1938年9月号が伝えるところによれば、つい最近ウラル地方のニージニー・タギール郡に旧教徒の隠棲施設が発見され、取り壊されたばかりであるとい

¹⁵ 「正教国ルーシ」1951年1号8頁。

¹⁶ 1950年12月7日、国外でのロシア正教会主教区会議(アナスタシー府主教主宰)に先駆けて行なわれた報告が、「正教国ルーシ」の1号8-10頁に転載されている。

¹⁷ とはいえフランス革命期にもまた、非合法の教会を組織しようという諸々の試みがあったのである。クリスチャン・レドレー Christian Ledré、『革命下の非合法宗教 Le culte caché sous la révolution』、パリ、1949年。

う。そこでは祈祷集会在夜に、野外で、許可なく、二人の「主導者」の指揮下に催されていたのだった。とはいえ残念ながら——と「無神論者」誌は付け加えている——、旧教徒の得意技はと言えば、撤去された隠棲所に代わって新たな隠棲所を築きあげることなのだ。旧教徒の実践するさらに別な非合法活動については、作家フェーヂン⁽²⁾が「プラーヴダ」紙 1937 年 9 月 16 日号で指摘している。その指摘によれば、彼らは大胆にもゴーリキー（旧ニージニー・ノヴゴロト）の教会で、正教と結託して礼拝式を挙行了たのである。またレニングラートでは旧教徒たちが誰憚ることなくチホン派の教会と同盟を結んでいる⁽³⁾。1937 年 9 月 10 日付けの「コムソモーリスカヤ・プラーヴダ」紙は、この同盟を「反ソ的キャンペーン」と定義づけている。

しかしながらこうした非合法活動にはすべて、信仰と礼拝の純粹性を損なう危険性がつきまとわずにはいない。こうした状況下では、とはすなわちすでに諸々の分派が跋扈しており、必要なのはただ一つの確たる規律といったような国では、多種多様な歪曲が生じていても不思議はない。どこかに報道されていたのだが、カフカスでは実際にさる女性が聖職者の役目を果たしていたという。非合法の正教徒と旧教徒との境界線はもちろんのこと、非合法の正教徒と典型的な分派との境界線もしばしば曖昧模糊としている。クロンシタットのイオアン（ヨハネ）をキリストの化身として崇めたヨハネ教信者の再出現も目撃されている¹⁸。黙示録的な観念が、ちょうど迫害の時代にそうであるように、極端なまでに蔓延することもしばしばであった¹⁹。さらにまた、たとえば 1936 年の調査時に、あるいは何らかのアンケートの際に、キリスト教徒であると言明した勇気ある人々について、その信仰の教義内容まで闡明にすることも容易なことではない²⁰。神について問われた小学生の信者たちは、次のように答えたようである——「神さまのことなど誰にも分かりません。私たちも神さまが存在

¹⁸ 「最新ニュース」 1938 年 7 月 28 日号、1939 年 2 月 12 日号。

¹⁹ 「無神論者」 1939 年 20 号。「反宗教者」 1939 年 5 号。修道士、修道尼たちが反キリストのために働くのを拒否した事実については、上述した通りである [第 3 部第 4 章「殉教者たち」]。

²⁰ 1933 年、コルホーズとはまだ無縁だったトヴェーリ県、ノヴォルジェフスク郡の農民に対

するかどうかは知りませんが、それでも心の中で何かを感じるのです」——「神さまとは宇宙の道徳的な秩序です」——「神さまですか？ それは私たちを超えた至高の力です」²¹。これらの回答は、確かに不十分だとはしても、それほど稚拙とも言えまい。

それでもとにかく、ロシア民衆がどんな形にせよ、合法的にせよ非合法的にせよ、連綿と堅持してきた宗教的な感情と宗教的な実践——それこそが今日無神論国家が教会に与えている慎ましやかな地位の獲得に決定的な役割を果たしたのではなかろうか。もしも筆者の個人的見解を披露し、上述の問題に答えることが許されるのなら、こうした休息の獲得に預かって力があつたのは、ロシア民衆のキリスト教的粘り強さと彼らのときに英雄的な信仰心に他ならず、それに比べれば公認の高位聖職者たちの妥協的な政策など微々たる力に過ぎなかったと言いたい²²。いずれにせよ人間的なレベルでは、ロシアにおいてキリスト教が生き永らえることができた最大の理由は、人間のうちに宿る根絶不可能な宗教的欲求だと言えよう。だが、全能の国家によって、しかも物質的、イデオロギー的な手段の限りを尽くした、前代未聞の大迫害が半世紀以上にわたって繰り返されたにもかかわらず、それでもなおかつキリスト教は依然ロシアに残っているという事実——これは人智に不可解であり、より高度な解析が必要である。神秘哲学者ヴラヂーミル・ソロヴィヨフは死を間近に控え、友人のヴェリチコにこう語っている——「僕には、キリスト教徒が祈りを捧げるために再び地下礼拝堂に集う日が近々やってくるような気がする。なぜなら信仰はやがて、ネロ皇帝の時代ほど暴力的ではないにせよ、より狡猾にし

して行なわれたアンケートによって確認されたのは、農民すべてがイコンを所有していること、その3/4が奇跡を信じると同時に、宗教が何ら仕事の妨げにはならないと考えていること、そしてその83%が反宗教的な出版物を何一つ読んだことなどない、ということであった（「反宗教者」1933年9-10月号）。

²¹ 「反宗教者」、同前。

²² ある騎兵隊の青年兵の15%は、司令部がバックアップする40人の戦闘的無神論者同盟員たちの集中的な働きかけ（講演、映画、等々）に1年間ずっと晒され続け、それでも自分は信仰者だと明言している。彼らはまさしく生粋のキリスト教徒だったに違いない（「反宗教者」1931年1号60頁）。

て残虐な方法によって、すなわち欺瞞、愚弄嘲笑、偽造、その他諸々の方法によって迫害されることになるだろうからね… 君には近づきつつあるものが見えないとしても、僕には見えるんだ、この僕にはずっと前から見えているんだ」²³。

第3部第6章「非合法活動」 訳注

- (1) クルチツツの府主教ピョートルは、1917年に第11代総主教に選出されたチホンが指名した三人の臨時総主教代理の一人。彼はチホンの片腕的存在で、あくまでロシア正教会の自立性を主張し、反政府的態度を貫いたため、1926年に逮捕され、1937年にヴェルフネウラーリスクの監獄で銃殺刑に処された。
- (2) コンスタンチン・フェーゲン (Константин Александрович Федин, 1892-1977)。ソ連の小説家。「同伴者作家」として作家活動を始め、革命期における知識人の苦悩を描いた長編『都市と歳月』(1924)で注目された。作家同盟の第一書記も務め、第二次世界大戦後は、20世紀ロシアの現代史を描き切ろうとする長編三部作『最初の喜び』(1945)、『異常な夏』(1948)、『かがり火』(1961)を上梓している。
- (3) チホン派とは、ロシア正教会の存続をかけて反ボリシェヴィキ態度を貫いた第11代総主教チホンを擁護する聖職者や信徒を指す。1925年にチホンが逝去した後、1943年にセルギーが第12代総主教となるまで総主教座は空白であった。

²³ ソロヴィヨーフは1898年、『反キリスト者の物語 Краткая повесть об Антихристе』を含む『三つの会話 Три разговора』を出版している[『反キリスト者の物語』を付録とした『三つの会話』がペテルブルクで出版されたのは1990年と思われる]。彼が死んだのは1900年7月31日である。ヴェリチコ В. Л. Величко の回想記『ヴラデーミル・ソロヴィヨーフ。その生涯と作品 Владимир Соловьев. Жизнь и творчество』は、1902年にペテルブルクで出版されている。

後記

この小冊子の梗概は、言うまでもなかろうが、次の通りである。

まず第1部では、いくぶん時系列的な乱れはあっても、1917年以前に焦点を絞った形で、ロシア民衆の宗教とは何かが論じられている。また第3部で扱われているのは、ロシア民衆の宗教がロシア革命からロシアが第二次世界大戦に参戦するまでの間に直面した凄まじい迫害の軌跡である。第2部の主たる眼目は、キリスト教に遭遇してまもないロシア人の宗教心が悪の問題に対してどう答えようとしたか、その回答の提示という点にある。

読者に是非ともご理解いただきたいのは、ロシア民衆の宗教がキリスト教の諸組織やその信仰と実践を標的とした凄絶な撲滅運動に対し、死を賭してまで断固抵抗したという現代的な事実もまた、そのほとんどが本書第1部で明らかにしようとしたロシア民衆宗教の一般的な特徴によって説明可能だという点である。聖職者階級の心身両面にわたる破壊も、普段から聖職者などにほとんど頼らないことに慣れた信徒たちにとってはさしたる重要事ではなかった。教義教育の禁止も、知的であるよりも感情的であり、教理問答というよりも家庭的伝統によって伝承されてゆく民衆宗教には、大した打撃とはならなかったのである。福音書信仰は印刷された福音書などなくとも十分存続できるのである。教会の破壊でさえも、たとえそれが礼拝式の喪失という点ではどれほど悲しむべきものであろうとも、民衆には存命中の聖人なり、ユローヂヴィなり、殉教者なり、とにかくどこかに敬愛すべき対象があったから、ついに決定的影響力を持ち得なかったのである。教会が破壊されずに残った地域では、どんなに狹隘であろうとも、信仰の自由が保障され、礼拝式や聖歌の合唱、イコンの所有、多少の宣教が黙認されたが、そうした礼拝式からキリスト教の精髓を汲み取っていた民衆の間に宗教が生き延び続けるには、それだけで十分であった。そして結局のところ、もしも信仰のために苦しまなければならなかったとして

も、背負った苦悩というのは、たとえそれが機密とはまたまったく無縁なものだとしても、救済の担保に他ならなかったのではなかろうか？

ロシア民衆の宗教について、これまで本書ではそれを知識人階級の宗教とは区別しようと腐心しながら、その特徴を抽出しようと努めてきたが、その結果読者からはロシア民衆の宗教を理想化しようとしていると謗られても仕方あるまい。しかしながら、本書に描かれたものがロシア全民衆の宗教であるなどと強弁するつもりは毛頭ない。本書に叙述されているのは、真に宗教的な民衆の間にもっとも普遍的に認められる諸特徴だからである。真に宗教的ではない民衆には、何ら学ぶところがあるとは思われない。ゆえに本書では対象外としてきたのである。

また本書には、ロシア民衆の宗教が独自性を持っているにもかかわらず、それをカトリック教会傘下で脈々と生き続けてきた西欧民衆の宗教と対照してみようなどという考えもさらさらない。一般大衆的なレベルでは、東方教会と西方教会の差異など取るに足らない問題なのだ。その反対に読者には、東西双方の民衆宗教の間に横たわるとくに顕著な相似性にこそ注目してほしい。

たとえば、イコンに接吻する、何度も繰り返し十字を切る、平伏す、悲嘆の涙に暮れるなど、敬虔さの多種多様な外的表現を備えた感情露出型宗教というものにおけるロシア的特質を例にとってみよう。現代に生きる我々の敬虔さは抑制され、次第にその外的な感情表現が避けられるようになってきている。その理由は山ほどある。だが、たとえば、涙を流しながらの祈祷は何世紀にもわたって日々実践されて続けてきた。その涙はすべて自然なものであり、必ずしも悔恨の涙ではなかったとしても、感動の涙でもあった。羊飼いだった聖ジュヌヴィエーヴ⁽¹⁾は、「天を仰いで祈りを捧げるときはいつでも、その両目に涙を溢れさせていた」。またシエナの聖カタリナ⁽²⁾は、ミサにおいて聖体のパンを受け取ると突然さめざめと泣き出したのであった。時代が下って17世紀になると、ポンソナスの上級修道女の伝記の中では、どうしてもうまく主の祈りを唱えることのできない女牛飼いのことが取り上げられている。女牛飼いは上級修道女にこう打ち明けている——「『父よ』という言葉을唱え、天高くおわし

ます方が… その方が我が父なのだ… そう考えると… 目から涙が溢れ出し、一日中とまらないのです」。19世紀にはまた、何の変哲もないアルスの主任司祭が、ミサを執行しながら涙に暮れていたのだった。さらには学者たちも、そして「情感的信仰 devotion sensible」とか「涙の供物 le don des larmes」についてとくとくと論じる神学者たちまでもが、泣く術を心得ていたのである。ローマのミサ典書には「泣涕を請うための pro petitione lacrimarum」祈祷が3つ記載されている。心の中はさておき、信仰の外見的態度が無味乾燥なものとなってしまったのは、比較的最近のことなのである。

きわめてロシア的なもう一つの特徴は、「不幸な人々」、すなわち受刑者、あるいは犯罪者に対する敬愛の情である。ところでイタリアの作家シローネはその作品『非常口 Uscita di sicurezza』(1965年)の中で⁽³⁾、[イタリア中東部]アブルッツォ地方のさる少年のことを我々に教えてくれる。その少年は、二人の憲兵に挟まれ、びっこをひきながら歩いてゆく惨めな男を見ると、父親にこう言う——「ねえ、あの人何だか変だよ!」。すると父親はその少年に厳しい視線を投げかけ、こう叱りつける——「囚人をからかうもんじゃない! 絶対だめだ!」。「どうして?」と問う少年に、父親は答える——「囚人は自分で自分を守れないからさ。それに、もしかしたら無実かもしれないじゃないか。いずれにしても囚人は不幸な人なんだから、からかつてはいけないんだ」。この場面は実話のように思える。おそらくは自伝的な事実であろう。ここにはすべてがある。すなわちここには人間の裁きというものに対する懷疑もあれば、またキリスト教的な憐憫もあるのである。

巡礼については言及するまでもなかろう。かつて巡礼は、ロシアの場合とまったく同様に西欧においてもまた、犠牲や危険を伴うものであることはもちろん、家庭崩壊の引き金ともなったし、また不具者や乞食、宗教歌の門付けたちに随行されるものでもあったのである。筆者はかつてフィレンツェで聖週[復活祭直前の一週間=ロシアの受難週間]を過ごした折、ドゥオモ前の広場である男がキエフのペチェルスキー大修道院の「宗教歌」の門付けたちが口ずさむのと寸部違わぬキリスト受難の物語を単調な旋律に乗せて吟唱するのを耳

にしている。

ユローヂヴィはロシアの、あるいは東方の特異現象として認知することができるだろう。とはいえカトリック圏の西欧にも、謙虚さと苦行による自己卑下、あるいはキリストの模倣を渴望する精神の持主がいなかったわけではない。ただそうした人物を見極める必要があるだけである。折に触れて十字架への熱愛を実践した偉大な聖人として、たとえばアッシジの聖フランチェスコ⁽⁴⁾を筆頭に、聖フィリッポ・ネリ⁽⁵⁾、聖イグナチウス・デ・ロヨラ⁽⁶⁾がいるし、また現代にまで時代を下れば、アラブの子供たちから侮辱を受けようとナザレの路上で糞を拾い集め、子供たちに石を投げつけられたフーコー神父⁽⁷⁾もいる。そうした人物は他にも枚挙の暇なく引用できよう。とはいえ彼らは、ロシアのユローヂヴィとまったく同じ役割を演じていたわけではない。

ロシアのユローヂヴィにとって真の兄弟と呼べるのは、16世紀の騒然としたシエナに数多く存在した「パッツィ・デ・クリスト pazzi di Cristo (キリストゆえの狂人)」である。悪童だったが、ふとしたきっかけで回心した農民ブランダーノもその一人である。彼こそは本物のユローヂヴィである。彼はキリストのように苦しむことを願い、いつの日か十字架に磔にされることを望んだ。彼は裸足で、檻褌を身に纏い、髪を伸ばし放題にし、鋭利な石で胸をかきむしるか、あるいは重い十字架を背負って歩き回った。死骸の髑髏を振り回しながら、大人と子供とを問わず誰に対しても、死の目前に迫っていることを思い起こさせた。自ら進んで恥辱と殴打に身を任せた。権力者など眼中におかず、権限そっちのけで説教を垂れ、邪な聖職者たちを罵倒した。シエナがローマ教皇とフィレンツェの連合軍に包囲され、存亡の危機に瀕すると、彼はシエナ市民軍の司令官となり、勝利を収めた後、ローマ教皇に意見すべくローマへ赴いている。彼はローマ教皇の足もとへ一握りの脛骨を投げ出し、こう言った——「死を忘れるなかれ (メメント・モリ)！」。その後しばらくしてローマ教皇はローマからカプチン会⁽⁸⁾の高僧たちを追放することになるのだが、そのときブランダーノは群衆の間でこう叫んでいる——「ローマでは邪悪な輩と犯罪者が溢れ返り、善良な人々や有徳の士は追放される」。その後またしばらく

すると、シエナはドン・ディエゴ・デ・メンドーサ率いるスペイン軍の支配下におかれる。ディエゴ・デ・メンドーサがシエナ制圧のための築城を監督していると、ブランダーノは詩篇の一節 [127 編] を歌いながらそこへ近づいていっている——「主が家を建てられるのでなければ、建てる者の勤労は空しい。主が町を守られるのでなければ、守る者の目を覚ましているのは空しい」。この狂人ブランダーノこそはシエナの町の守護者であり、彼は町の自由を侵害する者に対し、至高の秩序が存在することを警告しようとしたのである。同じことがニコラ・クロプスキーにも当てはまる⁽⁹⁾。彼もまたイワン雷帝を震撼させ、プスコフの町を救ったのである。ブランダーノによるシエナ救済とニコラ・クロプスキーによるプスコフ救済は、ほとんど同時期の出来事である。ロシアの場合と同じように、西欧のユローヂヴィたちもまたしばしば預言者の役割を担う特権を有し、彼ら以外には誰も口にする勇氣もなければ、おそらくは口にする才能もないような数々の真実を一般大衆はもちろん、権力者に対しても容赦なく浴びせかけたのである。

最後にもう一つ。地獄に落ちた人々の聖母による神へのとりなしという考えが西欧民衆の信仰とは無縁であるとみなすのは間違いであろう。

イタリアのウンブリア地方に待降節 [クリスマス前の4週間] の日曜日毎に歌われる賛美歌が一つあり、そこにキリストに恩赦を懇願する地獄の住人たちが登場する。大天使ガブリエルと神に選ばれた人々が悪魔に対抗して彼らを弁護し、至高の審判者キリストは呪われた人々にその罪科を思い起こさせる——「お前たちは、私が腹をすかせ、咽喉を渴せているのを眼にしながら… 食べるものも飲むものも何一つ与えてくれなかった。私は放浪の身の上で… 裸足で歩いていたのに、お前たちは私から顔を背けた… 私は病人であり、囚われの身であった…」。すると地獄の住人たちは自己弁明に躍起になる——「主よ、あなたが数多の災難に打ちひしがれているのを眼にしたとき、私たちにはあなたの窮乏が分からなかったのです…」。至高の審判者は答える——「貧しい人がお前たちに施しをせがんだとき、彼の中にいたのはこの私に他ならない。お前たちは罪を犯すたびにこの私を十字架にかけてきたのだ。それにもかかわらず

私はと言えはいつでも、お前たちに思い知らせてやろうなどとはつゆ考えもせず、優しい気持で待ち受けていたのだ。去るがよい、呪われた者たちよ！」。かくして罪人たちは聖母マリアにすがりつき、マリアは自ら生んだ御子キリストを宥めすかそうと試みる——「私がお前を育てた母乳に免じて、我が子よ、少しは私の言葉に耳を貸し、私の擁護する人々を許してやっておくれ… 私はお前を9ヶ月の間この汚れなき胎内に宿し、幼かった頃のお前はこの両の乳房から母乳を吸っていたのです。もしも叶うものならば、どうか判決を取り消しておくれ」。

エミール・ジェバルはその作品『神秘のイタリア』にこのパセティックな賛美歌を引用しているが⁽¹⁰⁾、残念なことにこの論争の結末については何も言及していない。だが一目瞭然にして疑い得ないのは、この賛美歌を作った13世紀ウンブリアのカトリック教徒に靈感を吹き込んだのが、「神の母 [= 生神女 = 聖母] の苦悩巡礼」を翻訳したキエフの正教徒に靈感を吹き込んだものとまったく同一の心情であったということである。

一般的に言って、正教の精神性とカトリックの精神性を対立させようとするのは大きな間違いである。たとえば世間では、ロシア正教会は現世には無関心なひたすら神秘的存在であり、カトリック教会は天上界を失念してしまうほどに現世のすべてに心奪われた存在であるかのようにみなされている。これは、一方ではアッシジの聖フランチェスコや十字架の聖ヨハネ⁽¹¹⁾等々を黙殺し、また他方では大公たちと一致団結してモスクワ公国を建設した功を認められて叙聖された府主教たちのことを無視してしまうことである。概して正教は全般的にキリストの復活を主眼とし、カトリックはキリストの人間性とその受難を主眼としていると考えられがちだが、ところが現実には、正教ではカトリック以上に長く厳格な断食が行なわれてもいれば、聖人たちにおけるキリストの模倣に対する敬愛も決して欠かすことはないのであり、またカトリックでは復活祭時には壮麗この上ない礼拝式を挙行してきたのである。

実際のところ東西両教会の間には、とりわけ民衆宗教のレベルで言えば、絶対的な相違など何もない。つまり問題とすべきは、双方に共通する諸々の性格

なのである。確かにそれらの性格に濃淡の差はあるとしても、両者が起源を同じくしつつも育った環境を違えているのであってみれば、それは当然のことなのである。

さらにそのうえ、トリエントの宗教会議⁽¹²⁾以前、およびトリエントの宗教会議の影響力がいまだ及ばなかった17世紀初頭の、たとえばフランスの民衆宗教を調べてみると、それが1917年以前のロシアの民衆宗教にごく近似していることが分かる。フランスでもまた信仰は、教理問答的な教育によって厳密化されていたわけではなく、何よりも家庭内の伝承に依存していたのである。したがってその信仰は、その後に形成されていった信仰に比べ、知的色彩のより希薄で感情的色彩のより濃密なものであった。と同時にその信仰の実践はまた、より自由であり、より日常生活に密着したものであった。したがってそれは日々の労働や暮らし、苦しみや喜び、それに自然とより強く結びついていた。そして諸聖人が賑々しく祭られもすれば、農産物の豊作、あるいは災厄の終焉を祈願する行列がたびたび催されてもいた。信徒たちはたとえば、神の摂理への依存はもとより、悪魔の脅威もまたより痛切に自覚していた。当時はまた信徒たちとその司祭との間に、教養と品行の大きな格差から生じる障壁も存在しなかった。理性や秩序、戒律が導入されるのは、やっと17世紀後半になってからのことであり、そうして初めて民衆の宗教は神学者や教養人の宗教へと近づいていったのである。同様の進化は現在のイタリアではすでに終了しているが、上述した諸々の例から分かるのは、それらの地域では進化の始まりが遅かったということであり、進化はまた地域によってはその歩みがより緩慢だということである。

民衆宗教と神学者や教養人の宗教とのこうした接近相似は、次のようなことを考えさせてくれる。すなわち、ある国が牧歌的な生活を、あるいは手工業的で共同体的、直感的な生活を捨て去り、都会的な生活を——国家的に体制化され、合理化され、道徳化され、計量化された生活を採択しようとするとき、民衆の宗教もまた同一の路線に沿って変容してゆくものなのだ、と。本書でこれまで述べてきたように、ロシア民衆の宗教とて例外ではありえない。福音書的

で自由奔放な性格を備えたロシア民衆の宗教といえども、それは特定の民族、あるいは特定の教会に固有のものではなく、こう言ってはきっとスラヴ主義者やあらゆる民族主義者を悲しませてしまうに違いないが、それは文明化プロセスのある一時期を代表する目印に過ぎないと言うべきであろう。

「後記」 訳注

- (1) 聖ジュヌヴィエーヴ (Geneviève、422-502 年)。パリの守護聖女。フン族の侵入を予言するとともに、アッチラ王の攻撃の際にはにルテス (パリの古称) が蹂躪されることはないとは断言し、市民を鼓舞した。かくして彼女の予言は成就され、パリの守護聖女と崇められるようになった。祝祭日は 1 月 3 日。
- (2) シエナの聖カタリナ (Catharina de Sienna、1347-1380)。イタリアのドミニコ第三会修道女。そのエクスタシーと啓示によって有名で、グレゴリウス 11 世にアビニョン捕囚の終了と教皇座のローマ返還を決意、実現させた。祝祭日は 4 月 30 日。
- (3) イニャツィオ・シローネ (Ignazio Silone、1900-78)。イタリアの小説家。1921 年のイタリア共産党創設とともに入党し、反ファシズム運動に参加する一方、農民を主人公とする抵抗文学を発表。1945 年以降は社会党員に転じて政治運動に従事しつつ、文学活動を展開し、国際ペンクラブの会長も務めた。主著に『フォンタマール』(1930)、『パンと葡萄酒』(1937、邦訳)、『ルーカの秘密』(1956)、『独裁者になるために』(1962、邦訳)、『哀れなキリスト者の冒険』(1968)。
- (4) アッシジの聖フランチェスコ (Franciscus Assisiensis、1182-1226)。フランチェスコ修道会の創始者。謙虚と従順、愛、清貧を基盤とした修道生活を実践するとともに唱道した。祝祭日は 10 月 4 日。
- (5) 聖フィリッポ・ネリ (Fillipo Neri、1515-1595)。イタリアはフィレンツェに生まれ、対抗宗教改革運動の代表者の一人として活躍し、オラトリオ会を創始した。オラトリオ、すなわち宗教的、道徳的題材による叙事的楽曲は、オラトリオ会で歌われた歌に由来する。祝祭日は 5 月 26 日。
- (6) 聖イグナチウス・デ・ロヨラ (Ignatius de Loyola、1491-1556)。スペインの宗教家。プロテスタントに対抗し、カトリックの発展のためにイエズス会を結成し、世界各地への伝道を実践した。祝祭日は 7 月 31 日。
- (7) シャルル・ド・フーコー神父 (Charles de Foucauld、1858-1916)。フランスはストラスブール生まれの軍人、探険家にして伝道師。モロッコを探検し、『モロッコ再認』(1888) を著す一方、1901 年からアルジェを拠点に宣教を行ない、イスラム教徒の多大

な尊敬を集めたが、第一次世界大戦中に原住民の反乱で殺害された。

- (8) カプチン会とは、フランチェスコ会の分派の一つで、1525年マテホ・ダ・バシオによって創始された。聖フランチェスコの戒律の厳守を第一義とする。
- (9) ニコラ・クロプスキー Никола Клопский というのは、ミハイル・クロプスキー Михаил Клопский とニコラ・プスコフスキー Никола Псковский とを混同した、パスカルの間違いだと思われる。クロプスキーと呼ばれるユローヂヴィは、ノヴゴロト近郷のクロプスキー三位一体修道院で15世紀に活躍したミハイルだけであり(イワン雷帝=イワンIV世の祖父イワンIII世の誕生と、そのノヴゴロド征服を予言したとされる)、プスコフをイワン雷帝から守ったとされるユローヂヴィのニコラは、ニコラ・プスコフスキー・ブラジェンヌイ Никола Псковский Блаженный、通称ニコラ・サロス Никола Салос だからである。ニコラ・サロスは、1570年のイワン雷帝によるプスコフ攻撃に際し、生肉を手に雷帝を迎え入れ、その非道を弾劾するとともに、その不幸をも予言することによって雷帝を震撼させ、プスコフから退却されたと伝えられている。たとえば、スクルィンニコフ著、栗生沢猛夫訳『イワン雷帝』(成文社、1994年)、217-218頁を参照。
- (10) エミール・ジェバール (Emile Gebhart、1839-1908)。フランスの大学教授にして作家。ナンシー大学で外国文学の教授として成功を収め、それが引き金となって1880年ソルボンヌ大学が彼のために南ヨーロッパ文学講座を開設すると、爾来26年の長きにわたってその講座の主任教授を務めるとともに、ソルボンヌでもっとも著名な教授として学生のみならず、世界中の人々の注目を集めた。1905年にはフランス・アカデミー会員に選ばれてもいる。旅好きで毎年夏の3ヶ月にローマ、ミラノ、フィレンツェ、ヴェネツィアを訪れ、資料を渉猟した。古代ギリシャ、およびイタリア・ルネサンスに関する造詣が深く、その造形に基づいた作品を数多く書いている。『神秘のイタリア L'Italie mystique』は1890年の作品。
- (11) 十字架の聖ヨハネ (Juan de La Cruz、1542-1591)。スペインの神秘神学者、詩人、聖人。カルメル会の改革者にして、跣足カルメル会の創立者。彼自身の神秘体験が歌われている抒情詩、および抒情詩注解を主としたその著作は、スペイン文学史に大きな足跡を残している。主著は『暗夜』。
- (12) トリエントの宗教会議とは、宗教改革の嵐が吹きすさぶ1546年から1563年の18年間、イタリアのトリエンテで、中断を挟みつつ三期にわたって行なわれた宗教会議のこと。カトリック教会側からすれば、プロテスタントによる宗教改革の危機を克服するため、カトリック教会内部の改革を進めるとともに、教義の強化を図ることを目的として会議であった。